

ムサビの教員が選ぶ

美大生におすすめの本

Recommended books for art students.

共通彫塑

戸田裕介教授

『方丈記』

(角川文庫 角川ソフィア文庫

ビギナーズ・クラシックス)』

[鴨長明][著] 武田友宏 編, 角川学芸出版, 2007



大地震、竜巻、大火災、不安定な政治による突然の遷都。平安時代の罹災者の悲嘆は800年の時を隔て現代を生きる私たちと何も変わらない。

著者は若くして出世の土台を血縁者に奪われ、さまざま復讐の手がかりを探し求めたが叶わなかった。そんな人生において「無常観」を体得した著者は晩年後鳥羽院が斡旋した官職就任要請さえ受けなかったと言われる。この、ある種屈折した著者の名は“ちょうめい”ではなく“ながあきら”と読む。

『方丈記』は、単行本・文庫本ほか今もさまざま出版されている。角川ソフィア文庫版には、竜巻の大きさをあらわす現代科学の図表をはじめ、本書で語られる火災延焼の方角を示す京都の略図など、ビジュアル資料がちりばめられ、私たちの理解と想像を助けてくれる。

暗唱している人が多い本書の有名な書き出し「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。」そのあとをまだ読んでいない人には、是非通読をお勧めする。



『詩のころを読む』

(岩波ジュニア新書; 9) 改版』

茨木のり子 著, 岩波書店, 2009



詩人 茨木のり子が編んだ「詩」の若者向けガイドブック。掲載されている詩は全て選りすぐりの詩人の素晴らしい作品ばかり。この本は一度読んだら手放せない。良本中の良本だ。いつも傍に置いておきたい1冊。

掲載されている「詩」だけを片っ端から全部読んだあとで、始めのページに戻って、茨木の解説と一緒にひとつひとつゆっくり読み返してみる。読書方法としては邪道かも知れないが、どう読んだってこの本はピクともしない。『詩のころを読む』から入って、是非『茨木のり子詩集』(谷川俊太郎選/岩波文庫)や『倚りかからず』(ちくま文庫)、それから他の詩人の詩集も手に取って頂きたい。「自分の感性くらい自分で守ればかものよ」。戦中戦後を生きた女性の強さもこの詩人の感性の柔和さと相まって素敵だ。

岩波ジュニア新書には他にも良本多し。



『生体の観察 新版第2版』

中尾喜保 著, メヂカルフレンド社, 1991



私が造形学部1年生のとき履修した「美術解剖学」の教科書。本書は、生きた人間の動作に連動して変化する骨格や皮膚や筋肉を観察し美術表現につなげるための研究書。

'80年代はじめの彫刻学科1.2年生の実技は、頭像・胸像・半身像などを粘土で順々に制作し、加えてギリシャ彫刻やレリーフの石膏像をデッサンし模刻するカリキュラムだった。当時の私にはその多くが伝統技能修得訓練としか思えず素直に取り組めなかった(モデルさんに「マジメに制作に取り組みなさい!」とお説教されたことも一度や二度ではなかった)。

けれど、人体塑造にリアリティーを見いだせなかった当時の私にさえ、本書は興味深く、図版と解説は見て読んで面白かった。中尾先生と宮永美知代先生の二人三脚で行われた講義は聴いて楽しく刺激的だった。私は自分の"興味"と"行動"の分裂に戸惑いながらも、この分厚く重たい本を小脇に抱え、春夏秋冬休まず7号館4階の階段教室に通った。

『ネオフィリア 新しいものの好きの生態学』

ライアル・ワトソン 著, 内田美恵 訳,

筑摩書房, 1988



著者は大学で植物学、動物学、古生物学を学んだ後、ドイツやオランダで人類学の研究に従事。その後、大学に戻り地質学、化学、海洋生物学、環境学、人類学の学位を取得、ロンドン大学では動物行動学で博士号を取得した。多視点的思考で書かれた彼の書籍はどれも興味深く文章も読みやすい(原典英語)。内田美恵氏による和訳は原文を更に輝かせる最高の翻訳だ。

注意すべき点は、ワトソンが「百匹目の猿現象」などもっともらしいウソの法則を捏造した結果、社会から干された科学者だということだ。

もし彼が科学者ではなく、科学的知識が豊富な芸術家として執筆していたなら、彼の本は世界的ベストセラーにはならなかっただろうが、今も読み継がれているかも知れない。『風の博物誌』(木幡和枝訳/河出書房新社)などは、彼以外誰にも書けない。彼は自然から神秘を感じ取り思索する詩人なのだ。選別せず全著作を焚書するにはもったいないのがワトソンの本である。



『戦争語彙集』

オスタップ・スリヴィンスキー 作,

ロバート キャンベル 訳著,

岩波書店, 2023



ウクライナの詩人スリヴィンスキーは、現在進行中の戦争から避難している市民の言葉を集めて1冊の本を編んだ。「体験」や「思い」や「願い」はさまざまに悲喜こもごも。

この本を読みながら、第二次世界大戦の末期に無念のうちに亡くなった学徒兵の遺稿集『きけわだつみのこえ - 日本戦没学生の手記』(中村克郎/岩波文庫157-1)を思い出した。同書には死者が残した遺書やメモが集められている。

それに対して本書には、育ちも置かれた環境も異なる人々が、仕事、年齢、性別に関係なく、突然奪われた日常の困惑や悲しみを生者が発するリアルタイムの言葉として集められている。今日の暮らしにかすかに残る平和の面影を探る避難者の言葉はときにあっけらかんとしてより悲しみが増す。私のロシア人の友人たちと同じ名前のウクライナ人避難者の名前の多さに複雑な思いが強くなる。

日常と戦渦の暮らしは似たような顔をして、同じ地平線上に並んで立っている双子なのだ。